

32 北谷王子と黒鉄座主（イ）

今の護国寺、沖縄の波の上のね、お寺にね、ちよつと偉いお坊さんがいたらいいんですね。この方は隠居して、那覇の若狭町という所にね、悟道院というお寺を持つて、座主になつていたらいいんですね。

そしたらこの、黒鉄座主くろがねざしという座主がね、たいへん偉いお坊さんだったらいいね。高僧だったらいいですよ。高僧でね、偉いお坊さんだからね、たいへんまた美人であつたらしいんですね。頭が切れるしね。この方のお経のお話はもう、みなこれ聞いたらね、もうみなうなずくぐらいでね、たいへんこの素晴らしいお説教をするお坊さんでね。美人で好男子でね、いいお坊さんだったらいいんですが。

この方はね、魔術を使つたらしいですよ。術ね。忍術よ。そしてね、この意味でね、若い女の方々もね、たくさんね、この方のお経を、講話を聞きにしようと思つてうみんなひっきりなしに聞きに来ようと思つたらしいんですね。

よ。そしたらね、このお坊さん、忍術を使つてね、女の方が、きれいだなと思つた方を忍術でね、すぐこの女にいたずらしようと思つたらしいんですね。それがね、もうきりがなく次々とそういうふうになつてしまつてね。王様がこれを耳に入れて、

「これは大変だ。これは世の乱れだ。これは退治しなければ大変だ」ということでね、王様の思いつきで、これを退治することになつたらしいがね。なかなかこの、耳切り坊主という、この高僧のお坊さんはね、頭も鋭いしね、感が速いから、なかなか退治することができなかつたらしいですよ。

そうしてね、北谷王子ちやたんおうじといつて王様の弟、この方をね。北谷王子という方はね、王様のすぐ、今の皇太子の次男坊さね。そして、皇太子の次男坊であるんでね、武勇が勝れているしね、文学者で頭が切れる、たいへんいい王子であつたらしいですよ。そしてね。

「それは私が退治するよ」と、王様に申し入れてね、ある日ね、この、退治することになった決議をしてね。したら、この方はね、もうとにかく高僧でね、講話も上手だし、もう何だが、この女にいろいろこの、手

を出すんでね、結局世の中から次第次第にあきらまれてしまつてね。このお寺に行くお客さんがいなくなつたらしいんだな。したら、お寺の境内は草ぼうぼうするしね、もう古寺でね、何かしら怖いような寺だったらいいんですね。そこでね、北谷王子という王様の弟の

ね、武術の達者な頭の切れる王子がね、治金丸ちきんがまという大きなものをね、三種の神器というくらいにね、たいへん切れる刀があつたんですね。王様にね。これ、治金丸ちきんがまというたいへん名刀でね、持つて行つてね、行つたらね、この黒鉄座主というお坊さんはね、頭は速いから、ああ、これは私を退治しに来たんだと直感でね。

「王子様がわざわざこの古いお寺に来てくれてありがとうございます」と感謝を述べてね、

「どうぞどうぞ、古いお寺であるが、どうぞ中へ入つて下さい」と言つてね、案内されてね、もうこの、お寺の中でね、ちゃんとして接待されたわけだね。そこでね、

「今日はあんと碁を打つために来たよ」と。
「ああ、そうですか」と。碁の勝負をしようというこ

とで来たらしいんだな。

「ああそうですか、王子様と碁の相手になるといったらたいへん名譽なことですよ。ひとつお相手になりましょう」と言つてね、碁盤を前にしてね、二人とも座つてね、碁を打ち始めたらしいんだな。

するとね、この北谷王子という武芸者はね、ここに治金丸をすぐそばに置いてあるから、これで切られたらたいへんだなと思つてね、坊さんはね、忍術を内緒でかけたらしいんだな。そうしたら、碁を打ちながらね、結局は王子にね、碁のほうが負けているらしいんだな。これ、ごまかそうとしてね、坊主がね、術を掛けてね。したら相手はもう眠気をさして、した時に、立ち上がつて逃げようとしたらしいんだな。その時に、この治金丸という名刀でもつてね、

「坊主、待て」と言つてね、切ろうとしたらしいな。そしたら耳が切れたらしいな。この北谷王子という王子様もね、この術をやつぱし出来ようと思つたらしいんだな。黒鉄座主という坊さんも術はたいへん上手だったらいいね。鳥に化けて飛んで行こうとしたところをね、

「待て」と言つてね、この名刀でもつてね。このお坊

さんはね、生命を断つわけです。殺されて、退治されて。そして、この後からね、

「いつかは、必ずこの恨みを返しますよ」と言われてね。

そしたらね、この、うふむら御殿^{うどうん}という家はね、殿様の家は、男の子が生まれたらね、次々に亡くなるらしいんだな。この坊さんがいたずらしたんでしょね。そしてね、この坊さんがね、遺念でね、この、次々男の子が生まれたらね、もう全部死亡して亡くなって、後継ぎが出来なくなるらしいんですね。そこで考え付いたのが、男の子が生まれたらね、「大きな女の子があるよ」と言ってね、女の子の名前をね、付けてね。女が生まれたという。男が生まれたら、

「女が生まれた」といつてね、言ったらいいですよ。そこでね、この男の子はね、女の赤い着物を着てね、女らしくいつも女の姿をしてね。成長するまでよ。それから男の子が生まれてもね、こういったような死人が出るという不幸はなかったらしいんですよ。

そこでね、歌にして、この今さっき歌ったね、『うふむら御殿ぬうじよない、耳切り坊主が立つちよん

どう』。「何名立っているか」というと三名立っているよと。泣く子どもは耳を切られるよと。この坊さんはね、耳きり坊主は、鎌もね、刀も刃物も持っているよ。泣いたらたいへんよ」と、子どもは子守歌をしてね、き たつてというのが沖繩の伝説ですよ。それが黒鉄座主といつてね、これは今の波の上のずっと大昔のね、隠居になった坊主らしいですよ。

字糸満 野原由宗